レクリエーションと群馬県レクリエーション協会について

1. レクリエーション運動のはじまり

レクリエーションは戦後 GHQ の勧めもあり、日本の民主化の推進や青少年の不良化防止(当時の文言)の施策として文部省が中心となり推進。また、青少年の健全育成の施策ではキャンプ、サイクリングなどの野外活動の推奨とあわせ活動の拠点となる施設づくりが進められた。

昭和 22 年には、第 1 回全国レクリエーション大会が金沢市で開催され、同時に全国組織結成の会議がもたれ「日本レクリエーション協議会」が発足、その 4 か月後に「財団法人日本レクリエーション協会」が設立された。

各都道府県ごとに協会設立指示があり、群馬県でも教育委員会指導課体育係の人々が日本レクリエーション協会のフォークダンス講習会に参加、県内指導者に伝え巡回指導を行いフォークダンス、スクエアダンスの普及に努めた。

昭和 39 年に、日本レクリエーション協会主催の上級指導者講習会が榛名湖畔の榛名富士センターで開催され、日本レクリエーション協会の総裁であった三笠宮様が 80 名の受講者と寝食を共にした。宮様がレクリエーションの必要性、協会の重要性を県教育委員会関係者に話されたことも契機となり、群馬県でもフォークダンス、スクエアダンスを中心にレク活動が盛んとなっていたことで、組織の設立や野外活動のための施設づくりが推進された。

県教育委員会体育課の講習会などを通じて社会教育や野外活動関係者、企業関係者にレクに対する理解が深まり県協会設立について検討され始め、県教育委員会体育課が事務局となり準備が推進され昭和 40 年 5 月 8 日に設立総会（自治会館 2 階南会議室)、記念大会を開催し「群馬県レクリエーション協会」が設立された。

2. レクリエーション運動の発展と県レクリエーション協会

昭和 39 年の東京オリンピックを境に、総理府が「国民体力づくり推進事業」に着手、さらに文部省が「学校開放事業」を打ち出すなど、国の施策に国民スポーツが大きく飛躍した。日本レクリエーション協会は「いつでも、どこでも、」を合言葉にニュースポーツセミナ―や高齢者レク等、生涯スポーツの推進に取り組んだ。

群馬県では、清水一郎知事の就任と共にスポーツ・レクリエーションの普及振興が一挙に進展し「群馬県スポーツ振興事業団」が誕生した。県民総参加が叫ばれ健康で豊かな生活を送るため県スポーツ振興事業団と県レクリエーション協会が両輪をなし、暗黙のうちにスポーツ・レクリエーション振興を促進、昭和 58 年の「あかぎ国体」へとつながった。

「あかぎ国体」では式典前の集団演技で県レクリエーション協会の加盟団体である群馬県地域婦人団体連合会が、婦人部門として地元群馬の民踊「さわやかぐんま」やあかぎ国体を記念して作られた「上州さわやか音頭」を踊った。44 市町村から 1800 人の婦人たちが浴衣姿で参加。式典後の集団演技と閉会式の集団演技は、35 市町村から 1000 名の県内婦人が唐笠を持ち祭袢てん姿で「木崎音頭」や「八木節」を披露し、式典全体に花を添えることができた。

3. 県レクレーション協会事務局

群馬県レクリエーション協会の初代会長は、県医師会会長や県公安委員長でのちの県体育協会長となる関口林五郎氏が、理事長には県体育課長の藤口末光氏が就任、事務局員はのちの県レクリエーション協会会長で当時、県体育課主事の飯塚ツヤ子氏。

昭和 59 年に県教育委員会体育課から県スポーツ振興事業団普及課へ事務局が移転、スポーツ振興事業団へ移転後はスポーツ振興事業団のプロパーや県からの派遣職員が県レクリエーション協会の事務局（局長、次長、事務局員）を務めることとなった。会長については、現会長の星名建市氏や中沢丈一氏、真下玄永氏など県議会議員等が就任。